

新学習指導要領がもたらしたもの

― 中学校の現状から考える

玉村 有紀

◇ 「たかが1時間、されど1時間」

中学校では、新学習指導要領が今年度から全面实施となった。年間総授業時数が九八〇時間から一〇一五時間となり、週あたりの時数では二八時間から二九時間へと一時間増えた。(ここでいう「二時間」とは授業一コマ＝五〇分を意味する)。時間割で言えば、五時間授業の日が週二日から週一日となり、あとの四日は六時間授業だ。さらに学習内容も三割ほど増加した。教室で「これなら土曜日も学校があつたほうが楽かも」とつぶやいた子どもがいたが、週一時間の授業増加で子どもが感じる負担感・疲労感は決して少なくない。

問題となるのは、年間一〇一五時間はあくまでも「最低ライン」であることだ。したがって、実際は一〇一五時間以上となるよう授業を計画する。北海道の冬は大雪・吹雪等による自宅待機や臨時休校があり、インフルエンザによる学年・学級閉鎖もある。これらを想定し、一〇一五時間を

下回ることがないように、どの学校も苦心して授業時数を確保している。今や、始業式・終業式の日、定期テストの日に授業を組むのは当たり前だ。私の勤務する中学校では、授業時数増に対応するために学校行事の「精選」を行った。市内では「夏休み・冬休みを短縮して登校日を増やすことを検討してはどうか」という意見もあがっている学校もあると聞く。

◇ 子どもも大人も忙しい

では、四月からの日課でどのような影響があつたか。

まず、生徒が生徒会活動や部活動に取り組み放課後活動の時間が短くなった。とりわけ学級活動の時間に支障が出た。学級役員会や係活動など、放課後の教室で子どもたちが自主的に行う活動はいろいろあり、どれも学級づくりには欠かせないものだ。部活動との兼ね合いもあるなかで、子どもたちの放課後は忙しくなった。

教員も同様である。放課後は子どもたちと向き合える時間であるが、一カ月に四日ほどしかない五時間授業の日の放課後には諸会議が入る。職員会議や校内研修といった大きな会議が優先的に設定されるので、学年や校務分掌の打ち合わせといった比較的少人数の会議は昼休みか六時間授業の日に設定するしかない。早めの資料配布や事前回覧で会議の短縮化に努めてはいるが、議題が多いうえにやはり子どもに関わる大事なことを検討するには時間が必要だ。必然的に会議時間は長くなり、勤務時間外に延長せざるをえないことが(これまで以上に)多くなった。放課後は、部活動の指導や授業の準備に加え、学級事務、教育委員会への各種提出物等の作成もある。職員室で、同僚と雑談を交えながら子どもたちの様子を交流することもしづらくなつた。

◇ 学校祭でのこと

子どもたちにとって、教室でたわいないおしゃべりをしながらみんなと作業をする時間は楽しいひとときであり、人間関係を深めることができる場でもある。特に、自分の居場所がないと感じている子ほどこうした場と時間は大切だ。行事はその絶好の機会である。

しかし、私が勤務する中学校では行事の時間を削減しなければならなかったため、学校祭は二日日程から一日半日程になり、準備期間も一週間に

短縮された。「学校祭特別日課」の間は、午前中は四時間授業で、午後からの二時間が学校祭の準備となる。放課後も決められた時刻までは作業をしてもよいが、委員会活動や部活動もある。限られた時間の中、子どもたちは演劇や合唱練習、壁新聞製作に一生懸命取り組んでいた。

学校祭当日来校した保護者から、「今年は時間が十分になかったので、うちの子は不完全燃焼。

今朝、『この状態で本番を迎えるのが悔しい』と言っていた」と聞いた。教室では決してグチを言わず、黙々と作業をしていた子だった。担任として接しながら、子どもの気持ちに寄り添えていなかったことに気づかされた。

担任の指示に従って決められた通りに動けば、短期間でもある程度完成度の高いものができるかもしれない。効率性・生産性が重視される社会において学校も例外ではなく、マニュアルや自らの「指導力」でもって子どもを動かそうとする教員もいる。しかし、「させられる」ことばかりでは、自ら考え、判断する力や主体的に行動する力は育たないし、創造性も養われないだろう。

準備の時間が十分に保障されていないなかで、担任である私は「各取り組みの責任者を中心に、自主的な活動となるように」と学級の子どもたちに指示した。子どもたちは私の期待に応えようとよく努力したが、達成感や充実感を味わうことができたのだろうか。学校祭の反省には、「あまり練習できなかつたが本番ではそれなりに対応できた

から良かった」という前向きなコメントもあったが、「短い時間の中で間に合わせたが、完成度は高いとはいえない」、「準備の時間を増やしてほしい」、「来年の学校祭は去年の学校祭のようなスケジュールにしてほしい」という意見もあった。しかし、現状では子どもたちの要望を生かすことはできそうにない。

◇ 学校の役割をとらえ直す

新学習指導要領の中で文科省は「生きる力」を「知・徳・体のバランスのとれた力」と定義している。そして、「変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく育てることが大切である」ことから、「伝統・文化の教育の充実」や「道徳教育の充実」を打ち出している。

子どもにとっての学校は、学びの場であると同時に同世代の仲間との出会いの場である。子どもは仲間との交流や生活体験をもとに自ら考え、学び、育っていく。これが「生きる力」の基盤となるものだと思ふ。しかし、学校からは余白が消え、子どもの成長を促す場や時間が次々と失われていく。それらを「道徳教育の充実」によって補おうとすることに無理はないか。

余白のない学校には、「学力向上」のかけ声のもと、「全国学力調査」で全国平均を上回ることを目標とする様々な取り組みがおびてくる。テスト

で測ることができる「学力」は一面的なものであるが、教室でうかがえる子どもたちの学びのプロセスや伸び方は多様だ。学校単位でくくられた数値からそれらは見えるだろうか。

今一度、子どもの視点に立つて、学校という場の意味や役割をとらえ直す必要があるように思う。

◇ おわりに

学校があつて子どもがいるのではなく、子どもがいて学校がある。地域ごとに自然環境・社会環境が大きく異なり、そこで育つ子どもたちもさまざまだ。

学校教育には、子どものニーズに応じて学校や教員の裁量に任される部分が必要だと思う。一方的に「管理」されることで思考停止に陥ったり、子どもにとって大切なこと・必要なことを見失ったりしないように、子どもたち一人ひとりとして向き合っていきたいと考えている。

玉村有紀（たまむら ゆき）

空知管内の中学校教員。教員としての立ち位置を教室の子どもたちから教えられる日々。